

もう一度



柳瀬川ひろし

「サーマターイムのターは、Amで入るか。Am6の譜面もあるけどねや」

のりさんが軽く言った。テンポはリズムボックスが刻んでいる。およそ120くらいだろうか。Amで入ってことはシャープもフラットも付かないはずだ。なんとかなるか。コード進行を思い出そうとしたが浮かんでこない。ミードーミーと入るはずだ。その先を考えようと視線を天井に送った。吊り上げられたアルテックA7紛いのどでかいスピーカが「よう、ひさしぶりやねえ」と微笑んだように傾いている。「テンポは110。Am、Dm、F、E、次はAm、C、D、Amで、もう一回繰り返し。かなりええ加減やけど、ピアノもおらんし、ええやろ」

思ったより遅いテンポだった。久しぶりのアンサンブルにびびってしまったのかテンポ感にかなりのずれが出た。このヤマハのアルトを引っ張り出してきたのも十年ぶりだろうか。音が出るのかどうかも分からない。

「のりさん、ちょっと音出ししていいですか。ずっと吹いてなかったんで」

「おれもおんなじよ、昨日からずっと吹いてないきねや」

久しぶりなのに冗談は相変わらずくだらない。

音の出やすそうなリードを選んで舐めてみた。かび臭くて甘酸っぱいようなそれでいて苦い味がした。（これこそが二十年という年月を主に吹かれることなく過ごしてきたサックスの哀愁なのだろう。）リガチャーのネジを弛める指先がまどろっこしい。リードをマウスピースの定位置にセットし、リガチャーのネジを軽く締める。次にネックをボディに差し込み締め付ける。コルクの様子を確認しながら静かにマウスピースを差し込んだ。リードの位置を微調整してリガチャーのネジを心持ちきつめに締めた。弛んでいた心のどこかも、いっしょに締め付けられていくような緊張を感じた。

僕は体の芯に深く大きく息を吸

僕は体の芯に深く大きく息を吸い込み、それをゆっくりと唇からリリースした。僕の体が楽器そのものに戻ったような一瞬だった。体の芯から戻ってきた息はのどの奥を這い上がり口腔内に拡がり、一瞬にしてリード面に収斂されていく。2半のリードは唇を共振させながら、そこに音を創り出す。こそばゆいような懐かしい感触がじわっと蘇ってきた。ビーフラットだ。

のりさんは、僕の口元を食い入るように見ていたが、音が出たことを確認すると、急に興味を無くしたかのような素振りで自分の音出しを始めた。

僕は、目の前に楽譜を思い描きながら、ゆっくりとそれをなぞってみた。1音1音確かめるように、そして音の質感も味わいながら吹いた。だが、以前のように楽譜は見えてこない。当たり前だ。二十年間一度も楽器に触れてこなかったのだ。楽譜は見えてこないが指は自然に動いていた。リードの振動が音に変わる直前に、思い描いた

音と違うことを体のどこかが判断する。そして、音として生まれるか生まれないかの瀬戸際で次の候補の音を探して指が動く。まるで誰かに操られているかのようだ。そんなことを続けているうちになんとかテーマを吹き終わった。音域の広くない楽曲なので筋肉のすっかり落ちてしまった口でもなんとかかなりそうだ。

少し落ち着いてくると、のりさんがテーマを演奏していることに気が付いた。直ぐにユニゾンで音を当てていく。のりさんは、虚飾を捨て去り一切の抑揚を排除したかのように淡々と演奏している。リズムボックスと完全にシンクロしている。早く曲のイメージを思い出せよと催促するようなセルマーの音だ。どうやらマウスピースを交換したらしい。歯切れの良さといい、パンチ力といい、前のとはかなり違う。催促するような演奏を何度か繰り返されるうちに、僕にも少し余裕ができてきた。しかし、口元はもう痺れ始めている。そう長くは吹けないだろう。

何回目かの曲の頭で、のりさんが一瞬ブレイクしてからテーマに突っ込んだ。いよいよのりさん流のフェイクが効いた演奏になってきそう。僕は、掛け合いのタイミングを取りながら、慎重にコード音を探していた。一回目は邪魔をしないように、吹きすぎないように控え目に当てていった。2回目からは、少しずつタイミングをずらして小節の頭がはつきりしないようなメロも入れていった。のりさんは、そんなことにはお構いなしの様子で吹き続けている。何巡目だったろうか。のりさんが僕を促すようなエンディングを、これ見よがしに吹いた。

二十年間のブランクを破って、僕のアドリブがかつてお気に入りのカフェだった場所に蘇るはずだ。僕のサクスがディーフラットで吠えた。しかし、もう口元を締め続ける力は残っていなかった。ディーフラットの音程もかなり怪しくなってブローした。

「のりさん、すみません。もう限界みたいです」

「しゃあないねや。これっばあでもう吹けんかえ。やっぱり休んだらいかん。おれもきのうから吹いてなかったき調子が出んちや」

のりさんは豪快に笑いながらそう言うと、愛器の水抜きをしながら飛び跳ねた。飛び跳ねながら水抜きをする人はめったにいない。おまけに飛んだ拍子に左回りに一回転して見事に着地を決めた。埃を被ったコーヒーミルやコーヒーサーバーが思わず踊り出しそうな気配がした。

この場所に足を踏み入れたときから感じていた違和感が何なのか、そのとき分かった。時間が止まっていたのだ。おそらく僕がこの町を去った日から、ある種類の時間は、この場所で流れることをやめたのだろう。のりさんが止めたのかもしれない。いずれにせよ、時間は止まっていたのだ。けれど、今、僕の中で確かに動き始めた。

「ほんじゃあ、今度はあさってでえいかえ。けんど、今日から毎日吹いちよきよ。毎日吹きよつたらすんぐ戻るわえ」

僕は、楽器を片付けながらこの場所集った日々のことを思い出していた。

棚では、LPレコードのジャケットが「日焼けしたぜよ」と笑っている。もう針を落とされなくなって安心しているのだろうか。時代はすでに平成になって久しい。「のりさん、バンドのみんなは今どうしてますか。僕も転勤で東京に出てからすっかりご無沙汰してしまって、こんなこと聞くのも今更なんですけど」

「バンドはもう十年前にやめちゆう。メンバーもおらんかったで。ピアノの今ちゃんとドラムのタッキーは死んだ。あとのメンバーは家の仕事に精出しゆう。もうバブルの頃とは違うきねや」

「のりさんはこの前どうして僕に声をかけてくれたんですか。みんなに挨拶もせずに



東京に行ったのに」

「もう一回1から練習し直してジャズが本当はどういうもんながかを掴みたいがよ。あの頃は、なんちゃあ分からんずつ勢いだけで吹きよったき、聴かされる方は気持ちようなかったと思うで。自分も気持ちようて聴くもんも気持ちええジャズがやってみたいがよ。おまんもそう思うちよったろう、ほんとは。若い頃にやりたい思うてもできざったことをできざったで終わりとうないがよ。ほんじゃけ、いっしょにやろう思うてな」

僕は、20年前にやっていたジャズには満足していなかった。基礎練習もろくにせず、ただ自分達でアドリブと呼び、でたらめに吹いているだけだった。楽しかったのはジャズではなく仲間と共有できる時間のことだった。そのくせもっとうまくなりたい、このままではいけないとも考えていた。そんな僕の心の内を、のりさんは分かっている合わせて

くれていたのだろう。

のりさんのこの店は閉店していったいどのくらいたつのだろう。目を閉じると、いつもカウンターの前で身を乗り出すようにして聴いていた女子高生や、窓際に陣取ってビールで盛り上がっていた商店街のおじちゃん達の顔が浮かんでくる。生演奏のないときはのりさんのチョイスしたレコードがスピーカから流れていた。そんなときには坊主頭の高校生たちがマンガ本を手にリズムをとっていた。

「のりさん、もう店はやらんが？」

のりさんはアメリカ人のように大きく手を広げ両肩を上げた。小首を傾げたその様子は20年前と少しも変わっていなかった。

僕は、カフェを再開してほしいと思った。が、店をやっていくことの大変さは、のりさんに聞かなくても分かる年齢になっていた。

のりさんは、大好きなバンド仲間を失い、最大の楽しみだったバンドをやめ、大切

のりさんは、大好きなバンド仲間を失い、最大の楽しみだったバンドをやめ、大切な店も閉じ、今どんな思いで自らを再生しようとしているのだろう。

サクスの手入れを終えケースにしまうと、なんだかサクス吹きに戻った気がした。まだ仕事は見つかっていない。けれど、のりさんが「サクスの練習」という大きな課題を与えてくれた。僕の再生の第1歩だ。

お礼を言って、かつてカフェだった場所を去ろうとしたとき、のりさんがにやにやしながら語りかけてきた。

「ええフレーズが浮かんだがよ。もうちょっと吹いていかんかえ」

のりさんはとっくの昔に再生していたのだ。そのエネルギーがどこから生まれてくるのかは、まだ分からない。だが、「若い頃できなかったことをできないと諦め、そのままにして人生を終わりたいくはない」という強い思いが今のポジティブな生き方に

表れているのだと理解した。

僕も本気で仕事を見付け汗を流して働いてみよう。例えばボランティアでも構わない。人と関わり誰かの役に立とう。そして、いつかのりさんとバンドを再結成しジャズをやろう。

僕は手にした楽器ケースを静かにテーブルに置き、のりさんを見た。